

信じた人々の特権

ヨハネの福音書 1章 6-13節

はじめに

月の第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話することになっています。ヨハネの福音書が書かれた目的は、20：31にこう書かれています。「**これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである**」。つまりこのヨハネの福音書は、これを読む人たちが、イエス様こそ神の子キリストであると信じて、永遠のいのちを持つために書かれたのです。ですから、このヨハネの福音書をよく読めば、イエス様こそ神の子キリストであることがよく分かる、また救われることができるということなのです。

1：1-5には、イエス様は単なる偉大な聖人ではなく、神であり、世界が創造される前から存在し、世界を創造された方であること、また世界に「永遠のいのち」と希望の「光」をもたらす方であることを学びました。

今日は、そのイエス様に対して、私たちはどのような態度をとればよいのかということを知りたいと思います。

1. まことの光を証しするために、神から遣わされたヨハネ

6-9節を見てみましょう。「**神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた**」。

イエス様は、ここで「すべての人を照らすまことの光」と呼ばれています。「光」の反対は「闇」です。この世は、アダムとエバが神様に背いて禁断の木の実を食べた時から、罪の性質を持ち、闇に包まれてしまいました。聖書は、罪に満ちたこの世を「闇」と表現しています。闇の中は、何も見えません。自分がどこにいて、どこに向かうべきかも分かりません。それゆえ闇の中には、絶えず不安と恐怖があります。5節に、「**光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった**」とありました。闇の中に輝いている光は、私たちに希望を与え、安心感を与えます。そして「光」に照らされる時、今まで見えなかったものが見えるようになります。

イエス様は、闇の中に輝いている光であり、私たちに照らしてくださる光です。イエス様こそ、私たちに平安と希望を与え、今まで見えなかったもの、例えば、私たち自身は何者であるのか、また神様はどんな方であるのか、また私たちがどこに向かうべきなのか、が見えるようにしてくださる方なのです。

神であるイエス様が人となられる前に、神様は「バプテスマのヨハネ」をこの世に遣わされました。彼は、「すべての人を照らすまことの光」であるイエス様を証しするために、神様に遣わされた人でした。彼は、イエス様こそ「すべての人を照らすまことの光」であると、人々に証言し、人々がイエス様こそ神の子キリストであると信じることを求めたのです。7-8節には、「証し」という言葉が三回繰り返されています。このことから分かるように、バプテスマのヨハネの使命は、イエス様を「証しすること」であったのです。そして、人々をイエス様への「信仰」へと導くことであったのです。

「証し」というのは、証言することであり、それが本当であること、本物であることを保証することです。バプテスマのヨハネは、イエス様こそ、私たちに照らす本当の「光」であること、本物の「神の子」「救い主」であることを、証言し、保証したのです。

私たちも時々、「証し」をする機会があります。信仰の体験談を話すことでもありません。しかし「証し」をする時の大切なポイントは、イエス様こそ、本当の「神」、本物の「救い主」であることを、自分の体験談を通して、証言し、保証することです。確かに私たちは、イエス様を見たことも、神様を見たこともありません。しかし私たちは、聖書の御言葉に基づく信仰において、イエス様こそ本当の「神」であり、本物の「救い主」として証言し、保証するのです。そして、その「証し」の目的は、私たちの「証し」を聞く人々が、イエス様こそ神の子キリストであると信じるようになることなのです。

2. 世はこの方を知らず、ご自分の民はこの方を受け入れなかった

では、バプテスマのヨハネの証しによって、人々はイエス様こそ「すべての人を照らすまことの光」である、イエス様こそ神の子キリストであると信じるようになったのでしょうか。10-11節を見てみましょう。「**この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。**」

イエス様は神であり、世界が造られる前から存在し、世界を造られた方でした。それなのに世の人々は、イエス様が人となってこの世に来られた時、イエス様が神であることを知らなかったのです。世の人々は、罪によって闇に包まれ、見えるべきものが見えなくなっていたため、イエス様が誰であるか、神であることが分からなかったのです。

イエス様は、世の人々に知られなただけでなく、「ご自分の民」にも受け入れられませんでした。ここでの「ご自分の民」とは、ユダヤ人のことです。神様は、世の人々の中からアブラハムを選び、アブラハムを通して「神の民」としてのイスラエル民族を形成されました。それは、イスラエル民族を通して、神様の祝福を世の人々にもたらすためでした。しかし神であり、世界の創造者であるイエス様が人となってこの世に来られた時、イスラエルの民、ユダヤ人たちは、イエス様を受け入れなかったのです。受け入れないどころか、十字架に付けて、殺してしまったのです。11節に、「この方はご自分のところに来られた」とありますが、それは「ご自分の家に来られた」という意味です。神であるイ

イエス様にとって、「神の民」であるユダヤ人は、家族であり、自分の故郷でした。神であるイエス様が、「神の民」であるユダヤ人のもとに来られたということは、「ただいま」と言って帰ってきたようなものです。しかし「ただいま」と帰って来たイエス様は、ご自分の家族、故郷に受け入れられず、追い出され、殺されてしまったのです。

もしイエス様を神と信じ、世界の創造者、イスラエルの民を形成された方と信じるなら、イエス様を知らず、受け入れず、十字架で殺してしまったということが、いかに愚かで恩知らずなことであるかがお分かりいただけると思います。

3. この方を受け入れ信じた人々は、神の子どもとなる特権を与えられる

では、イエス様はすべての人に受け入れられなかったのでしょうか。そうではありません。イエス様を信じ受け入れた人々もいたのです。世の多くの人がイエス様を知らず、「神の民」でさえ、イエス様を受け入れずに殺してしまうような中で、イエス様を信じ受け入れる人々には、どんな祝福があるのでしょうか。12-13節を見てみましょう。「**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望む所でも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。**」

イエス様を「すべての人を照らすまことの光」、また神の子キリストであると信じ、受け入れた人々は、「神の子ども」となる特権を与えられるのです。これまで、「神の民」はユダヤ人に限定されていました。しかし、ユダヤ人がイエス様を受け入れなかったので、「神の民」はユダヤ人以外に広げられたのです。「神の民」となる条件は、血筋や家系、国籍によらず、イエス様を信じ受け入れることです。イエス様を神の子キリストであると信じること、イエス様こそ闇に包まれた私たちを照らすまことの光であると信じることです。そうすれば、「神の民」となるどころか、「神の子ども」とされるのです。つまり神様を「父」と呼ぶほど、神様との親しい交わりに入れられるのです。そして神様の愛と守りの中で生かされ、神様が持っているすべての祝福を、相続して受け継ぐことができる特権を与えられるのです。

イエス様を信じる時に、誰でも「神様の子ども」とされ、「神の家族」として迎えます。しかし、その時には「養子」のように迎えられるのではなく、13節では「神によって生まれる」と言われています。つまり「実子」として迎えられるのです。私たちは、イエス様を信じる時に、新しく「神の子ども」として生まれるのです。そして、「神の子ども」として、もう一度最初から人生を始めるのです。全く新しい人生を始めるのです。そして神様の「御言葉」というミルクによって育てられ、養われて「神の子ども」として成長していくのです。そして「教会」という「神の家族」の中で互いに愛し合い、仕え合う中で成長していくのです。

「神の子ども」として、新しく生まれる時、そのことのしるしとして、私たちは「洗礼」を受けます。「洗礼」は、私たちの罪が清められ、新しく「神の子ども」として生ま

れたことの「しるし」です。また「教会」という「神の家族」の一員とされたことの「しるし」です。イエス様を信じ受け入れ、「神の子ども」として新しく生まれた人は誰でも、「洗礼」を受けることが求められるのです。だからこそ、バプテスマのヨハネは、イエス様を証しし、イエス様を信じ悔い改める人々に、バプテスマ、つまり洗礼を授けたのです。

「生まれる」ということは、自分の力でできることではありません。私たちは誰も、自分の力でこの世に生まれてきた人はいません。生まれることは、常に受け身です。全く新しい人生を始めること、「神の子ども」として生まれることも、決して自分の力でできることではありません。13節に「神によって生まれた」とあるように、神様によらなければ誰も、「神の子ども」として生まれること、全く新しい人生を始めることもできません。私たちにできること、それはただ「信じる」ことです。イエス様を神の子キリストと信じ受け入れる時、神様が私たちを「神の子ども」として生み、人生を全く新しくしてくださるのです。私たちにできること、それはイエス様を信じ、神様にこれからの人生を委ねることです。その時に私たちは、「神の子ども」としての全く新しい人生を歩み始めるのです。

おわりに

今日の聖書箇所、私たちに求められていることは、神であり、世界の創造者であるイエス様に対して、どのような態度をとればよいかということです。世の人々は、イエス様が誰であるかを知りません。また「神の民」であるユダヤ人たちは、イエス様を受け入れず、十字架で殺してしまいました。では、私たちはイエス様をどのような方として受け入れるでしょうか。

バプテスマのヨハネは、イエス様こそ「すべての人を照らすまことの光」とであると証ししました。またこのヨハネの福音書を書いた、イエス様の弟子であったゼバダイの子ヨハネも、イエス様こそ「神の子キリスト」とであると証ししています。

神様が私たちに求めていることは、私たちが、イエス様こそ「すべての人を照らすまことの光」とあり、「神の子キリスト」と信じ受け入れることです。そのようにイエス様を信じ受け入れる時、神様は私たちを「神の子ども」として新しく生まれさせ、全く新しい人生を歩ませ、闇に包まれていた私たちを明るく照らし、平安と希望を与え、今まで見えなかったものを見えるようにしてくださるのです。

そして私たちに求められているもう一つのことは、バプテスマのヨハネのように、私たちもイエス様こそ、「すべての人を照らすまことの光」とあり、「神の子キリスト」とあることを証しすることです。イエス様こそ、本当の「神」とあり、本物の「救い主」とあることを、人々の前に証言し、保証することです。イエス様を信じ受け入れ、「神の子ども」としての「しるし」として洗礼を受け、イエス様を証ししていくこと、それこそ神様から私たちに求められていることではないでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

世の多くの人々は、イエス様を神の子キリストであることを知らず、受け入れません。しかし私たちは今、聖書の御言葉を通して、イエス様こそ「すべての人を照らすことの光」であり、「神の子キリスト」であると聞いております。神様が私たちに求めておられることは、御自身が遣わされたイエス様を、私たちが信じ受け入れることです。そして「神の子ども」として新しい人生を歩み、イエス様を証しして生きることです。

どうか一人でも多くの方が、イエス様を信じ受け入れ、「光」を見出すことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。